痩せ長いので主人が困るのだから、僕に關係はないにしても一つ困ることがあるのだ、それといふのは外でもない。
前に言つたやうに、長い事此上なしの主人だから、家の間や、林の中などを通る時は、人が通つた後でも、必ず蜘蛛の絲にぶつかる、朝の内はいゝが、日が高く昇つて、蜘蛛の巣に宿る露が消えると少しも見えなくなる。
そこで、主人は右手で僕の頭を握つて、兵隊さんの『捧げ……ツッ』のやうに、顔の前に突つ立てて行くのだ。
蜘蛛の絲の嫌いなのは、主人ばかりではない、なんぼ三脚の僕だつて、矢張り同じことだ、堪忍して默つて居れば、いい氣になつて僕を茶碗や、箸のやうに、無生物同然に、見て居るに違いない。
去年の冬は、僕を鍬の代りにして、道の雪を除けた事が幾度もある、其時などは、雪が足の間や、お臍の方まで入つて、あまりつめたいのに、シクノ〳〵泣いたよ。今年は、どんな事があつても、雪除ばかりはせぬつもりだ。
又僕をランプの臺にしたこともある、大嫌ひの油の臭ひがするやら、蟲が澤山集まつたのには、實に閉口した。まだまだ、こんな事を數へ上ると、幾らでもあるが、限りがないから、よしておく。
僕が主人嫌いになつたのも、遇然ではないから、僕を決して不忠不義の三脚と思ひ給ふな。

黄昏のスケッチ

鹿兒島　中島重治

夕陽は森羅萬象を悉く赤に染めて今し沈まんとして居る。
汀に立ち並んだ老いた松が、枝、葉を縱横にさし交はして微かに呟いて居る。涼しい夕風が遠い沖から海面を渡つて颯つと吹いて來ると、それが思ひ出したやうに松籟を奏でる。
遠山の上にムクムクと湧いた雲が、紅に輝やいて幾度か崩れては立ち直り、そしてそれが種々に形造つて居る。遠く海を包んだ山々が夢のやうに霞んで見える。
ヂヤブリヂヤブリと小波が渚を洗つてゐる沙地の上に、一管の筆に此の自然と親しんでる、一人のうら若い藝術家が居る。
それが私です。
カンパスが次第々々に彩られて行くのを獨り微笑んで居る……
それが私です。
ぢつとして凝視て居ると、此の儘自然の中に滅入つてしまいそうな氣がする。
つと風を孕んだ帆船が二隻、夕日を一杯浴びて北から南へと駛せて行く。
やがて赤い雲が樺色となり、そして紫と變ると、何處からとなく山から海へ靄が下りて來て薄絹を一枚一枚蔽ひかむせるやうに夜の幕が下りて來る。
私は今更らしく自然の、あくまで偉大なると、そして、變化に富みしと、描き易いやうで難いのに感じた。

と靜かな夜氣を顫はして船唄が微かに聞えて來る。はや沖に漁火が二ッ三ッ瞬き初めた。

景福宮の春

在京城　健　堂　生

春風若綠を戰そぐ日柏楊小葉黃ばみ春心地す、新四月內地櫻花にあれど朝鮮いまだ桃花の開くをも見ざるなり。予景福宮を見んとして光化門前に到る、道路廣巾にして往昔諸官衙兩側に築立されありしも今時洋式建築四五棟を見らく、左側朝鮮近衞隊兵營あり一人の步哨門前に立つ。門前南方を睨む大唐獅子二頭の石像あり、此像傳話を聞くに、此の景福宮昔時建築成りし時、南方に聳ゆる南漢の峯より噴火あり火塊京城市中にまで飛散し來り、王城及市中を全燒せし爲め、此の二像を作り飛火をうけしめ、其後火災を見ざりしと言ふ。

抑も此の宮は、昌慶昌德兩宮以前の建築に係り、太祖李成桂統一後の宮城中最も古きものに屬す、我が文祿年間民亂に罹り殿閣堂宇悉く灰燼に歸し、爾來二百五十有餘年蓬草の裡に殘礎を存する而已なりしが、先帝卽位の初大院君攝政に當り、王室の式微を痛嘆し、奮然一大勇斷を以て無前の大宮闕を建築し、大に皇室の尊嚴を立奉れり、時之れ實に我慶應元年なりとす、其後三十餘年間の王政は一に此宮闕より出て、明治二十八年に至りて、未の變あり、皇帝は遂に此宮闕を見捨て一時露國公使館に遷幸せられ、越へて一年現皇居なる慶運宮に還御在らせられたり、是より以後石門堅く鎖され復た鳳姿の影なく、蘭麝の香なし、今時一週三日宮を公開し觀るを得、城の周圍一千八百三十步、墻壁の高さ二十一尺、四大門を設け、正門を光化門と稱し、北を神武門、東を建春門、西を迎秋門と名づく、門內併合前守衞の巡檢居たり。

門前に於て切符を求め、初め光化門の天井畫を見る、畫一は海龜一は驢馬の虎に似たる如き、一は色をうせて見得ざりき、門二層樓にして壯麗且大なり。

宮庭若草黃色に生へ、彼處老柳木の糸枝黃葉を垂る邊破崩の家屋列らなりあれり、小石橋を過ぎ勤政門をぬけ勤政殿に出づ、殿前四五の石段あり、正一品從一品より從九品に到るまでの石標兩側にあり、之則ち正一品の勳位を有する者、其の石標まで來り皇帝に謁したりしとか、殿周石及練瓦を敷き詰めあり、殿內を伺へば四五の大柱天井高く、正面に玉座を設け背後の壁畫は北漢山の景なりと云ふ、床(ゆか)なく瓦を敷きたる土間日中薄暗かりき、此の殿則ち政を司りし處、軒下に二個の大火鉢形なる鐵桶あるを見ん。予二三枚のスケッチを得、後方に廻れば三四の門あり、四五殿閣ありき、之皇妃の居室及皇帝の寢室等なり、枯芝春風に靑子を生はし、番人もなく廢宮の愁寞庭荒れしとも掃除する者ぞ無きなり。(未完)